懐かしい恋人たち

映画とのめぐり逢い

永　六輔

懐かしい恋人たち

——映画とのめぐり逢い

永　六輔

懐かしい恋人たち
—映画とのめぐり逢い
一九七三年九月一五日初版発行

著　者　永　六輔
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一—三三
郵便番号　一一二
電話（三〇三）四五一一
振替東京六四一二一七

印刷所　東洋印刷
製本所　誠幸堂
0312-100030-4406
©1973

懐かしい恋人たち

——映画とのめぐり逢い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

プロローグ

最近になって劇場やテレビでの映画の再上映が多くなった。
チャップリン、キートンしかり、そして「カサブランカ」「駅馬車」「禁じられた遊び」「子鹿物語」「ローマの休日」「南太平洋」「花嫁の父」エトセトラ。
それは懐かしい恋人たちとの再会。
そして、その恋人をひきあわせてくれたキューピットが、
今は無い雑誌「映画の友」であった。
当時の淀川長治編集長は僕の「足なが叔父さん」でもあった。
だから、僕はこの一冊を「映画の友」とこの雑誌を知らない僕の娘達の為に贈ろうと思う。

■目　次

プロローグ　3
十年前「映画の友」に書いたのだ　7
僕の活動大写真史　59
懐かしきミュジカルへの片想い　79
映画音楽でいすくじょっきい　151
元「映画の友」編集長淀川長治サン　213
エピローグ　233

■装幀・イラスト　吉村　祥

■本文対談写真　山田多佳彦

■本文写真提供　フィルム・ライブラリー協議会

十年前「映画の友」に書いたのだ

中村八大サンと会話にメロディをつけてみようと話しあっていた。
「シェルブールの雨傘」が僕達のかわりにそれをやってくれた。
「こりゃ八大サンがみたら自殺しちゃうな」
もちろん、ジョークだったのだが、東和宣伝部が「その言葉を下さい」という。
お礼のクッキーに目がくらんで了解したら、道頓堀の立て看板にデッカク活字になってしまった。いわく、「中村八大が自殺する！」
言葉のニュアンスとは違うから一寸オーバーになった。
東和のクッキーはユーハイムだ。
ユーハイムは神戸に本店がある。
僕はこの間の夏を神戸で過した。
「淀川長治様御誕生之地」という石碑があるかなと思っているのだが、まだみつからない。
明治二十九年。
この年に生れた人は七十九歳。
神戸神港クラブで初めて映画を写したという記録が残っている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この日本で初めて映画を写したという場所を訪ねたら、ナントカという会社の保健会館が建っていた。

そのビルのどこか一隅にでもいいから、ここで初めて映画をやったんだぞという記録を残して置きたいと思う。

こういうのが真の映画ファンだね。当時の話を聞こうと花隈(はなくま)の長駒サンに逢う。

花隈というのは伝統のある神戸の花街、長駒サンは八十三歳の芸者サン。

何しろ若い時に伊藤博文に可愛がられたという人だから凄い。

千円札をみる度に彼を思い出すというから嬉しい。

僕もお札に印刷されたい。

その初めての映画の中に、「悪漢死刑の図」とか「芸者手踊りの図」という実写ものがあったという。

「芸者手踊り」というのはその前年、日本の芸者がアメリカに行った時に撮ったものらしい。

「悪漢死刑の図」なんていうのも嬉しいが、「鎖の大陸」で奴隷の首斬りをみている僕達と同じことで全く変りばえがしない。

「世界残酷物語」で喰べるための豚を撲殺するシーンがあったが、あれは面白がって撲殺しているのではない。

豚はなぶり殺しにすると肉に血がまわって美味になる。

本格的になるとあんなものではない。
生きているのにまず皮をひんむく。
豚は、グワーッと悲鳴をあげる。
声も高くて大きいほどよろしい。
耳をチョン切る。シッポを抜く。
ぶんなぐる。けっとばす。
これが豚をおいしく召上っていただくコツでございます。
どうぞ、おためし下さいませ。
軍隊では豚をボールにしてラグビーをさせたほどだ。
腹もへるし、豚もうまくなる。
一石二豚である。

○

僕の部屋にはタヒチの椅子にすわったブリジット・バルドーの写真がある。
「エル」の表紙だったのを、ひっちゃぶいて額におさめてある。その額がどこにかざってあるかというと、バルドーの坐っているタヒチの椅子にかざってある。
この難解な文章を説明すると、彼女が坐った椅子そのものが、めぐりめぐって僕の家にある

という次第。

我が家の宝のひとつなのだが、まず「軽蔑」を観た時の話から。

「アイドルを探せ」を観にいった時は昌子（年令不詳）と千絵と麻理と僕の四人だった。

キス・シーンになると千絵が囁く、

「パパとママみたいね」……困った娘だ。

この時に「軽蔑」の予告篇をみて感動した。予告篇で感動しちゃ失礼なんだが、感動したんだから仕様がないじゃないか。

家族と別れて大阪へ来ると、「アイドルを探せ」をやっている劇場の隣で、「軽蔑」と「バストで勝負」の二本立をやっているんだから嬉しいね。

「軽蔑」だけを観ようと思って出かけたら四十分ばかり時間が余ったので、すぐ近所の八十円の劇場に入る。春川ますみのお尻がアップでのたうちまわっているので四十分で残念だったが「軽蔑」の方に戻る。

画面ではソフィア・ローレンの乳房がブルン・ブルン。

春川ますみのお尻とつながって混乱する。

これだから梯子映画はいけない。

マストロヤンニが出て来てブルルンを押え込んでエンドマーク。

続いて「軽蔑」だ。

分譲アパートの金が払えない僕みたいな作家が出て来る。
その夫人がB・B。
近頃の分譲アパートはアパートだなんていわない。
マンション、レジデンス、コーポ、ハイツ、ヴィラ、シャトウ、パレスと来るね。
僕は青山レジデンスに住んでいる。
字で書くからスムースだが、口でいうにレデデンスとなったり、レジンデスになったりする。
このくらいだから憧れのモンヌ・ジャローなんていっちゃう。
バルジット・ブリドーというが如しである。
この人のお尻が可愛らしかった。
あんなお尻の人を沢山飼って、「永」なんていう焼印をジューッと押しちゃったりしたい。
僕がこういうことを書くと昌子夫人は軽蔑する。
寄生虫と呼ばれても怒らなかったくらいだから、軽蔑が軽蔑にならない。
やがてあきらめてその一流の軽薄さを尊敬するようになる。
「軽蔑」の隣で「鬼婆」をやっていた。
吉村実子と乙羽信子が裸なので観る。裸だとなんでも観ちゃうみたいだが、ゴメンナサイ。
でもオードリイ・ヘップバーンが裸になっても僕は観ない。
もし裸になったら、僕は顔を両手で覆うであろう。

そして指の間から……いや、やっぱり観ない。
大阪の街でも「マイ・フェア・レディ」のポスターが目立つ。
勿論、オードリイ・ヘップバーンのイライザが豪華なドレスをお召しになっていらっしゃるわけだが、このヘップバーンが和服を着たことがあるのは余り知られていない。
そんな写真もみたことはない。
ところが一九五八年のMGM映画「緑の館」に出演中の早川雪洲の前にとまった車から降りたった振袖の美人が、オードリイ・ヘップバーンというくだりが彼の自伝に出て来る。
ファンとしてはなんとかお目にかかりたかった。
早川雪洲という人はスケールの点で日本人離れしているが、彼の言葉で我々映画ファンに興味のある事件を並べる。
「バレンチノは僕の代役でスターになった」
「ルイ・ジューベの演技を開眼させたのも僕」
「ミッシェル・モルガンをワンサから抜擢して役をつけたのも僕」
とこういう次第である。
早川以後に、早川に並ぶ世界的スターはまだ出ていない。
三船敏郎がもう一歩というところだが、ハリウッドに城を建てて何百人というパーティを毎晩の如く繰りひろげたという雪洲の伝説にはほど遠い。

明治二十三年生れだから八十五歳。
少年時代には切腹をしたこともあるという、サムライの生き残りみたいな人だ。
渥美清がアフリカから帰って来たが、彼は外国にいると「サムライ！」と声をかけられることが多い。明治初期の写真に残されている武士の顔つきをみると、渥美清の顔によくぶつかる。
坂本竜馬、近藤勇、みんなあんな顔だ。
「ハタリ！」という街があったそうだ。ジョン・ウェインが来てロケをしたので、「ハタリ！」という名前になってしまったとのこと。
お土産に象の耳の皮で作った財布を貰った。「象の耳はタップリ大きく福耳だろう、だから財布にするとお金がたまるんだ」
アフリカでも、福耳なんていうのかなと疑ったが、貰いものにケチをつけるのは失礼なのでだまって押しいただく。
「ハタリ！」という映画のポスターが「軽蔑」の中でかなりハッキリ何度も出て来る。
B・Bがジャック・バランスの車に乗せられ、つまり、軽蔑のキッカケになるシーンは全く「ハタリ！」のポスターの前である。
ゴダールは「ハタリ！」が好きなのかなと思う。

○

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com